

三田 一彦

リルケの »das Leere« についての長めの注釈

三田 一彦

(...) , la vita di Budda circolò in Europa
come la vida di un la martire cristiano,
santificato dalla chiesa, ...

Antonio Gramsci

(1200 年頃までの中世の話ではあるが、)
仏陀の生涯はヨーロッパにおいては
キリスト教の殉教者の生涯として流布していたし
教会にも正当化されていた、

グラムシ『獄中書簡』より¹

枠組み「Rilke と禅」について

欧米文学研究の世界では稀有のことであろうが、たとえば『リルケ論集成』のような研究書が編まれるとしたら「リルケの禅」は避けて通れない、不可欠のテーマであり、Rilke のテキストを解明する際に有力な手懸かりとなるであろう。„The World of Zen. An East – West Anthology“² と題された本が今机上にある。小説家でもあり、東洋地域にも詳しい Nancy Wilson Ross 女史が編者となっている、類書も少なく、禅思想研究にとっても興味深い本である。「東洋」の側からは、欧米で禅の話になるとお馴染みの鈴木大拙に並んで、久松真一が選ばれるなど編者のセンスが冴えている。「西洋」では Kierkegaard、Kleist、John Keats、Lewis Carroll、Heidegger 等々に伍して Rilke も載せられている。それも、他の詩人、作家、思想家に比して異例にも四つのテキストから断片が採録されている。通例、Heidegger を除いては³、禅との親密性を読み取ることは試みられないので、このアンソロジー

¹ Antonio Gramsci: Lettere dal carcere. Giulio Einaudi Editore 1955. p.56.

² Nancy Wilson Ross: The World of Zen. Vintage Books 1960 (以下 Ross).

³ 既に定番的研究課題になっているが、一冊挙げるとすると、Hans-Peter Hempel:

リルケの「das Leere」についての長めの注釈

は貴重な業績である。しかしながら、コメントが一切存在しないという、愛想のないこと夥しい編集方針のようで、この点が惜しまれるが、これも次世代への宿題であり、問題提起が為されたと得心しておこう。

では、独語、英語あるいは仏語の詩の一節、一つの文が、縁も所縁も一見したところでは有りそうもない「禅」を体現している（と見做される）のは何故か。

「不立文字」は中国禅以来の伝統的な禅宗教学のスローガンにひとつであり、「言葉に依存せず」という、幾多存在する仏教宗旨の中で、禅宗を特徴づけている主張である。仏法は「以心伝心」で広めて行くべきという立場である。しかし、奇妙ではないのか。中国の寒山詩の伝承においても、又、日本における中世五山文学の興隆にも、更には江戸後期の良寛禅師の詩作にもみられる通り、禅と詩は不可分の関係でありつづけて来た。

つまり「不立文字」とは、通常の言語コミュニケーションと一線を画した、敢えて言うならば、「詩的言語」の立場の宣言ではないのか。禅の実践（＝参禅）の場で、この「詩的言語」効果が発揮されるのが、「公案」と呼ばれる、師と弟子との間で交換される対話（むしろ対決とした方が実相かもしれない）である。

例えば、「父母未生来の自己」という「公案」がある。まだ出生していない時のお前は一体誰なのか、という問いである。禅が何を目指しているのかを端的に示している。一見ただけではナンセンスそのものとしか言い様のない言語表現に満ち溢れているのが禅の世界と言える。しかしながら、合理的判断からは了解を得られない禅的言語は、詩を眼前にしたとき、その有効性が明らかとなる。実際、先行研究として第一に挙げるべき Kassner は „Die Sonette an Orpheus“ の部の第 23 番から第三連、第四連を挙げて、「これこそ禅である。少なくとも言語による、概念言語ではなく生命あるイメージ言語による『公案 (Zen-Problem)』の解答である」と記している⁴。「禅と詩」を問う場合、鳥瞰図的に、つまりマクロ的視点の提示に終止しがちである。だから Kassner の姿勢 - 一つ一つの詩作品に即して究明しようとする姿勢 - は教導的である。ミクロ的に取組むこと、これこそ拙稿の目指す所である。

Heidegger und Zen. Athenäums Taschenbuch Bd.168. 1992. になろう。
Heidegger から出発して禅へ到達する思考過程が詳述されている。

⁴ Rudolf Kassner: Sämtliche Werke. Bd.10. G. Neske 1991. S.509-510.

三田 一彦

„Erlebnis“ における »das Leere« の意味

Ross は言う、「中国の禅僧は一つの山寺から別の寺へと長い徒歩の旅をしながら、自然と接することで自己実現を得ることを好んだ」⁵。こうした僧は雲水と称される。この姿が Rilke の„Erlebnis“の と付加番されたエッセイ中の心的出来事と重なってくる。本文にはこう記されている。

des Wassers reines und vielfältiges Benehmen und was Heroisches im Vorgang der Wolken war, ihn übermassen ergriff,⁶
様々に方向を変える、澄んだ川水（せんすい）の流れと、勇ましく流れ行く雲が途方もなく彼の心を捉えた。

連想によって観えてくるのは禅的世界である。ここで er が 体験 するのも参禅のひとつであると考えられないだろうか。一般に、座禅の究極の目的は悟りにあるとされている。そのために先ずは、無念無想の心的状態に入ることが肝要と教えらる。このこと自体を否定する必要はない。しかし、これだけが座禅だと断定するならば、参禅はつまらない。むしろ、様々な想念が、次から次へと沸き起こってくるのも座禅の在りのままの姿と言うべきではないか。道元禅師の「自己をならふといふは、自己をわする々なり」に達する途は、唯一、無我の境地しか有り得ない、と断言は出来ない。夢か現か、自分でも分からない、自分とは思えない自分と出会う夢想の境地、これも「自己をならふ」場なのである。Rilke の『体験』こそ、この境地を言語化した貴重なエッセイである。そして、禅の立場から読むとすると、エッセイ中では »das Leere« という一句に焦点があう。特に、本文中この語句のみに記述記号 » « が付されていることが、読解のキーポイントになる。

ところで、エッセイ „Erlebnis“ は二部構成になっている。 は 1906 年から翌年にかけて、あるいは 1908 年のカプリ島における不思議な体験が契機となっている。ある夜、聞こえてきた鳥の鳴き声が決定的核心として言及される⁷。

⁵ Ross, S.19.,

⁶ Rainer Maria Rilke: Werke. Kommentierte Ausgabe in vier Bänden. Hg. v. Manfred Engel, Ulrich Fülleborn, Horst Nalewski, August Stahl (以下 KA). Bd. . Insel Verlag 1996. S.669.

⁷ 上田閑照/柳田聖三 『十牛図』ちくま学芸文庫 1992. p.120-124.

リルケの»das Leere« についての長めの注釈

da ein Vogelruf draußen und in seinem Innern überstimmend da war,⁸
その時、鳥の鳴き声が外界と彼の内面とを一つにするように現存してもいた、

er sich gewissermaßen an der Grenze des Körpers nicht brach⁹
その鳥の鳴き声は、言うならば、身体の境を突破したのだ

この Rilke の言葉を禅に置換すると、「身心脱落」に尽きる。これこそ道元禅師が宋の天童山に座す師、如浄禅師より伝えられた禅の精髓なのだ。非日常的、神秘的な世界の話のようだが、「身心脱落」とは参禅そのものを指すのであり、祇管打坐に他ならない。帰国直後の禅師のメモより起こした『宝慶記』に書いてある通りである。

堂頭和尚示曰、参禅者身心脱落也、(...) ¹⁰
(堂頭和尚 (= 如浄禅師)、示シテ曰ク、参禅ハ身心脱落ナリ、)

強調しなければならないことは、この「身心脱落」こそが根源的に自由な自己の有り方であるということである。

『体験』における Rilke も「身心脱落」して自由だった。孤独になれたし、そして本来的なものが見照できた。彼の居た「場」とは如何なる空間であったのか。それは、

in menschlich (...) wenig eingerichteten Geräumigkeit¹¹
人間的にはほとんど生活感のないただっ広さに満ちている空間だった。

此における Geräumigkeit とは何であるのか。

sie sie nicht anderes als »das Leere« nennen würden¹²
人はそれ (sie = Geräumigkeit) を「ダス レーレ」と呼ぶ他なかっただろう

⁸ Rilke: KA , S.670.

⁹ Rilke: Ebd., S.670.

¹⁰ 道元『宝慶記』岩波文庫 1939年. P.23 (表記は現代語に改めた).

¹¹ Rilke: KA , S.670.

¹² Rilke: Ebd., S.670.

さて、das Leere をどう訳すかが問題となる。とりわけ、前後に付された Anführungszeichen マークのニュアンスをどのように把握するのかを検討しなければならない。

相反する二つの意味系に大別できる。すなわち、有の否定としての「無い」という含意と理解する方向。「からっぽ」という言葉が訳語に適切な、日常語彙に即した場合である。面白味に欠けるが、無理しない読解である。ただし、引用符を活かしきれない。もう一つ、別の系列も考えられる。徹底してニュアンスの有する意味に拘わる仕方である。»das Leere« を「空(くう)」と訳してみる立場ならば、「Rilke と禅」のカテゴリー枠内に配置して論究できる。『般若心経』中の色即是空でよく知られている空論は、大乘仏教の中心思想の一翼を担っている。また、禅とも密接な関係をもつ。では「空」とは何か。般若經典の日本における第一人者である中村元は『般若心経』の注釈でこう説明している。

空 - 原語シューニャター (śūnyatā) の訳。「なにもない状態」というのが原意である。これはまたインド数学ではゼロ(零)を意味する。物質的存在は互いに関係し合いつつ変化しているのであるから、現象としてはあっても、実体として、主体として自性としては捉えるべきものがない。これを空という。¹³

「心身脱落」の境地というのは、まさにこの「空」を体現したときに、開かれる新たな視界なのではないか。しかしながら、Rilke に関する限り、彼がこのエッセイを執筆していた時点で、禅書に親しんでいた、とは考え難い。独語圏に禅の公案書が初めて紹介されたのは、1920年代の中頃のことなのである¹⁴。

むしろ、注目したいのは、Hesseの前掲書 „Siddhartha“ にも leer が使われていることだ¹⁵。希薄だが、この両詩人-作家の比較は興味深い。

また、留意すべきは「空」は仏教の占有語彙ではないことである。『旧約』の「伝道の書」(「コヘレトの言葉」)一章二節にも「ματαυτης」という語が反復して用いられている¹⁶。訳語の選択にもよるが、この語も「空」の関連語である。

以上のように『体験』における »das Leere« の意味実相は確定できない。確かなことは、テキストは自己完結的存在ではなく、テキスト間の対話的に関係づけられ

¹³ 『般若心経 / 金剛般若経』中村元・紀野一義訳註 岩波文庫 1960. p.19.

¹⁴ Ōhazama-Faust: Zen, der lebendige Buddhismus in Japan. 1926.

¹⁵ H.Hesse: Siddhartha. Suhrkamp Verlag 1974. S.94.

¹⁶ Septuaginta. Deutsche Bibelgesellschaft 1979. S.238.

リルケの»das Leere« についての長めの注釈

ることによって生成しつづける、ということである¹⁷。

Rilke の叙情と「もののあはれ」 - まとめ

彼の体験したことは、奇妙な程、道元禅の説く身心脱落と重なる。さらに上掲の訳出に明らかのように、その体験は自己と外界との境界なき結びつきを核としている。文章に保存される機会が少ないようだが、大悟あるいは悟りと言われる瞬間は種々多様であるが、その一つに、例えば僧堂の片隅の石、草または花と自己が一致するときがあるそう。Rilke の「世界内面空間」もこれと同じなのではないのか。肯定するならば、新たに「もののあはれ Achheit der Dinge」美学へと連なるはずである。

しかしながら、この拙稿では N.W. Ross のコレクションの Rilke の項目に『体験』中の前掲の一文を追加できるのではないかと指摘することで満足すべきだろう。ヨーロッパの言語のなかで、禅的なものを見出していこうとする Ross の試みは、増補改訂の作業を今後も続けていく価値がある。

Ein längerer Kommentar

zu dem Begriff »das Leere« von Rilke

Kazuhiko, MITA

Dieser Aufsatz ist als Vorbereitung für die vergleichende Untersuchung von Dichtung und Zen gedacht.

Konkret gesagt; Warum fügte Rilke dem Wort, »das Leere« Anführungszeichen hinzu? Um diese Frage zu beantworten, müssen wir »Abfallen von Leib und Seele« auf »Erlebnis« anwenden. Diese Ansicht ist der Kernpunkt des Dōgens Zen.

Auch wollen wir die Beziehung »das Leere« von Rilke zu dem »Kū« des Mahāyāna-Buddismus erörtern.

¹⁷ 拙論が念頭においているのは、Yury Lotman である。
Ю.М.Лотман: ИЗБРАННЫЕ СТАТЬИ. 3 vols. Aleksandra 1993.